

# 時を表す名詞と助詞「に」の共起関係

## 韓国人日本語学習者の発話時を基準とする名詞を中心に

安田寛二\*

(e-mail : kanji\_yasuda0614@yahoo.co.jp)

### <目次>

第1章	はじめに	第4章	結果
第2章	先行研究	第5章	考察
第3章	研究方法	第6章	おわりに

キーワード:韓国語母語話者日本語学習(Korean JSL Learner),助詞(Particle),  
母語(Native Language),中間言語(Interlanguage), 対照研究(Contrastive Study),  
第二言語習得(Second Language Acquisition)

## 第1章 はじめに

筆者は釜山にある大学の日本語学科に所属する学習者から、その日の別れ際に「先生、明日に会いましょう」という不自然な発話に何度も遭遇した。寺村(1991)では、日本語の時を表す名詞と助詞「に」に共起関係について大きく3点、以下のように分けられると述べられている。

- ① 助詞「に」が付く名詞
- ② 助詞「に」が付かない名詞
- ③ 助詞「に」が付いても付かなくてもいい名詞

\* 南山大学 大学院生 日本語教育

また홍 [ホン] (2003)でも韓国語の時を表す名詞と助詞「에 (エ)」の共起関係について日本語と同様に大きく3点に分けている。

- ① 助詞「에」が付く名詞
- ② 助詞「에」が付かない名詞
- ③ 助詞「에」が付いても付かなくてもいい名詞

このように時を表す名詞と助詞の共起関係は日本語と韓国語で類似する点がある。本研究ではこのような対照研究的な観点から先行研究を基に日本語と韓国語の時を表す名詞と助詞の共起関係を比較し、調査を通じて韓国語母語話者日本語学習者の時を表す名詞と助詞「に」の共起実態、習得状況を明らかにする習得研究である。蓮池(2007)は韓国語には、日本語の助詞に類似した機能をもつ助詞が数多く存在するため、韓国語を母語とする学習者にとって、日本語の助詞習得の際には母語との類似点がプラスに働くと述べている。一方で蓮池(2007)の研究では日本語と韓国語の用法のずれによる負の転移の可能性も示唆している。しかし、本研究のきっかけである「先生、明日に会いましょう」に関しては、日本語も韓国語も本来ならば助詞は共起しないのにも関わらず、共起してしまっている。つまり日本語と韓国語で用法が類似しているのにも関わらず、マイナスに働いてしまっているのである。本研究では以下の2点を課題とし、韓国語母語話者日本語学習者の時を表す名詞と助詞「に」の共起関係について明らかにする。韓国人日本語学習者の発話時を基準とする名詞と助詞「に」の共起の実態を明らかにする。

韓国人日本語学習者の発話時を基準とする名詞に対する助詞「に」の選択原因を明らかにする。

## 第2章 先行研究

### 2.1 助詞「に」と「에」

日本語記述文法研究会(2009)では、助詞「に」は、主体、対象、相手、場所、着点、手段、起因、時、領域、目的、役割、割合などを表すとしている。助詞「に」はさ

まざまな用法があるため、日本語学習者にとっては難しい項目であることが予想できる。また 국립국어원 [国立国語院] (2005) によると、韓国語の助詞「에」は韓国語の助詞の区分の副詞格助詞にあたり、場所の位置、動作や行為が及ぶ場所、時刻と時代、開始時間、単位を表す (pp.423-424) としている。

## 2.2 時を表す名詞の分類

日本語記述文法研究会 (2009)、寺村 (1991)、益岡・田窪 (1992) は時を表す名詞を2つに分類している。

①発話時を基準として相対的に指し示す時を表す名詞 (以下、発話時を基準とする名詞) は、基本的に助詞「に」を伴わない。

1a.明日〇、事務所で社長に会う。

(日本語記述文法研究会 2009 : 85)

②発話時とは関わりなく絶対的に指し示す時点を表す名詞は基本的に「に」を伴う。

1b.1時に事務所に来てください。

(日本語記述文法研究会 2009 : 85)

また、益岡・田窪 (1992) の主張では例文 c.のように、これら①と②の名詞が接続する場合は、後続する名詞の種類によって助詞「に」の有無が決まるとしている。

1c.展示会は先週の土曜日に始まった。

(益岡・田窪 1992 : 82)

## 2.3 韓国語の発話時を基準とする時を表す名詞の分類

ホン(2003)においても、発話時を基準とする時を表す名詞と助詞「에」の共起関係は日本語とほぼ同じことが主張されている。しかし、すべてに当てはまるのではなく、固有語の時を表す名詞には助詞「에」は共起しないが、漢字語の時を表す名詞には共起するという区別がなされている。ただし、내일 (明日) は漢字語の時を表す名詞であるのにもかかわらず共起しない。

## 2.4 日本語と韓国語の発話時を基準とする名詞の用法に関する表

先行研究をまとめ、表 1、2 を作成した。漢字語と固有語に着目した研究があるほかは日本語と韓国語は類似していると考えられる。しかし、先行研究の結果では「先生、明日に会いましょう」に対する解決には至らない。

〈表 1〉日本語の発話時を基準とする時を表す名詞と助詞「に」の共起関係

a.発話時を基準として相対的に指し示す時 点が決まる名詞	例：明日図書館で先生に会う。 訳：내일 도서관에서 선생님을 만나다.
基本的に「に」が共起しない	

〈表 2〉韓国語の発話時を基準とする時を表す名詞と助詞「에(エ)」との共起関係

a.発話時を基準とする時を表す名詞 (固有語の場合)	例：내일 만남시다. 訳：明日会いましょう。
「에」が共起しない	
b.発話時を基準とする時を表す名詞 (漢字語の場合) (「내일(明日)」を除く。)	例：민지는 작년에 일본에 갔다. 訳：민지는 去年 日本へ行った
「에」が共起する	

## 第 3 章 調査方法

本研究<sup>1)</sup>では、先行研究を基に特定項目誘出調査の質問、多肢選択問題を作成し

1) 時には学習者の発話データを集めるため、ボイスレコーダーを用いる。録音をすると緊張してしまう学習

調査、分析を行った<sup>2)</sup>。その後、回答に対するフォローアップインタビューを行った。

調査対象者は韓国釜山にあるT大学校日本語学科に所属する大学生 40 名<sup>3)</sup> (1 年生 10 名、2 年生 10 名、3 年生 10 名、4 年生 10 名) を対象として、特定項目誘出調査、多肢選択問題をそれぞれ 10 分程度行った。

特定項目誘出調査では発話時を基準とする名詞、絶対的な時点を指し示す名詞などを引き出せるような質問 8 つを作成した。調査時は一方的な質問により学習者がプレッシャーを感じないようにするため、会話をしながら調査をする。以下は、特定項目誘出調査で用いた質問項目である。

〈表 3 a〉 特定項目誘出調査質問項目

- |   |
|---|
| <p>(1)○○先生の授業はいつありますか。</p> <p>(2)教会の授業はいつありますか。</p> <p>(3)最近、いつ[好きな食べ物]を食べましたか。</p> <p>(4)最近、いつタクシーに乗りましたか。</p> |
|---|

〈表 3 b〉 特定項目誘出調査質問項目

- |   |
|---|
| <p>(5)先週、先々週、先月どれでもいいですが勉強以外に何をしていましたか。</p> <p>(6)昨日の夜、今日の朝、学校に来る時どれでもいいですが何をしていましたか。</p> <p>(7)1 月、2 月、3 月どれでもいいですが、どこかに行きましたか。</p> <p>(8)来週、再来週、来月どれでもいいですが勉強以外に何かしますか。</p> |
|---|

多肢選択問題は助詞を選び文章を完成させる問題である。また 1 ~ 5 の段階で回答

---

者がいると考えられるため、十分にリラックスさせてから調査を行う。

2) 研究では丹保 (2010 : p.41) や荻宿 (2010 : p.324) と同様に、「~にする」「~に比べて」「~にいて」のように「に」を用いずに表現することのない慣用句や連語は調査から外す。

3) 1 名から調査に対する同意が得られなかったため、39 名分のデータを用いて分析を行った。

する 5 件法を用い、回答に対する自信度も下記の問題例にあるようにチェックさせた。自信度を測ることで助詞選択との関係を考察する<sup>4)</sup>。自信度は 1 が一番低く、5 が一番高い。多肢選択問題で作成する文は表 4 に提示した。便宜上、本文中では実際に提示した順番とは異なる。以下には問題例も提示する。

問題例：明日 [で を に へ なし] 友達 [で を に へ なし]に会う。  
 자신감 <sup>낮</sup> 1.....2...3.....4.....<sup>높</sup>5                      <sup>낮</sup> 1.....2...3.....4.....<sup>높</sup>5

〈表 4〉 多肢選択問題で完成させる文

- 1) 明日友達に会う。
- 2) 私の弟は昨年高校を卒業しました。
- 3) 1時に学校へ来てください。
- 4) 민지 (민지) は夏休み (に) 日本へ行く予定です。
- 5) 彼女は春休み (に) ずっとアルバイトをしていました。

## 第 4 章 結果

### 4.1 特定項目誘出調査の結果

特定項目誘出調査では以下のような結果<sup>5)</sup>が得られた。発話時を基準とする名詞が出現した回答のうち、助詞「に」が共起した回答と共起しなかった回答<sup>6)</sup>をまとめている。「き

4) 単に助詞を選択させても学習者の時を表す名詞と助詞「に」の共起関係に関する習得状況を把握するのは困難である。自信度を測ることが学習者の習得状況すべてを把握することにはならないが、自信度を測ることで、選択するだけの問題よりも正確な習得状況がわかると考えられる。助詞選択のパターンは正答、誤答の 2 通りあり、自信度のパターンは大きく分けると自信度が高いか、高くないかの 2 通りである。これらを掛け合わせると 4 通りの回答パターンを考えることができる。例えば、理想的だと考えられる習得状況としては正答で自信度が高い場合である。また誤答で自信度が高い場合は誤答の形で定着しているため、その形は違ふと気づかせ、正しい規則を教える必要があると考えることができる。

のう」「きょう」に関しては助詞「に」が共起しないことがわかった。また「週」の付く項目は個々の頻度は少ないものの、全体を見ると助詞「に」が共起することが多いことがわかった(10/12回)。

〈表5〉特定項目誘出調査結果 発話時を基準とする名詞

名詞	助詞「に」 あり	助詞「に」なし	名詞	助詞「に」 あり	助詞「に」なし
きのう	1	16	来週	4	0
きょう	0	4	再来週	2	1
あさって	0	1	先月	1	1
先々週	1	0	来月	1	0
先週	2	1	昨年	0	1
今週	1	0	去年	0	1

## 4.2 多肢選択問題の結果

各問題で使用されている時を表す名詞に日本語、韓国語それぞれの言語で助詞「に」「에」が共起するかを記述した(表6)7)。「○」は助詞「に」「에」が共起できる文、「×」は助詞「に」「에」が共起できない文である(灰色部分は日本語と韓国語で助詞の共起が異なるもの)。この表には各問題の正答率と回答に対する自信度の平均、また各問題の回答と自信度の相関係数も提示する。

- 5) なお、表記されている回答数は、時の名詞を含む回答であり、回答そのものは調査対象者全員から得ている。また、得られた時を表す名詞は質問直後に得られたものだけでなく、質問直後に時を表す名詞が現れなかった際に「それはいつ食べましたか。」のように時を表す名詞を引き出す質問をした直後の回答も含まれている。
- 6) 助詞「に」が共起しなかった回答には、もともと共起しないもの、共起すべきところに共起していないものに加え、時を表す名詞で回答を止めてしまったものも含む。
- 7) 多肢選択問題では日本語で助詞が共起し、韓国語で共起しないという組み合わせはない。

〈表 6〉多肢選択問題結果

問題	日本語	韓国語	正答率 (%)	自信度の平均	相関係数
1)	×	×	33	3.87	-0.07 (d.f.39)
2)	×	○	38	3.52	0.03 (d.f.38)
3)	○	○	87	4.05	0.46* (d.f.39)
4)	○	○	85	3.89	0.12 (d.f.39)
5)	○	○	87	3.71	0.11 (d.f.39)

\*0.05

まず予想されることとして、問題 2) は日本語と韓国語で助詞の共起のしかたが異なるため、正答率が低くなることが予想できる。また、その他の問題は日本語も韓国語も共通しているため正答率は高くなることが予想できる。

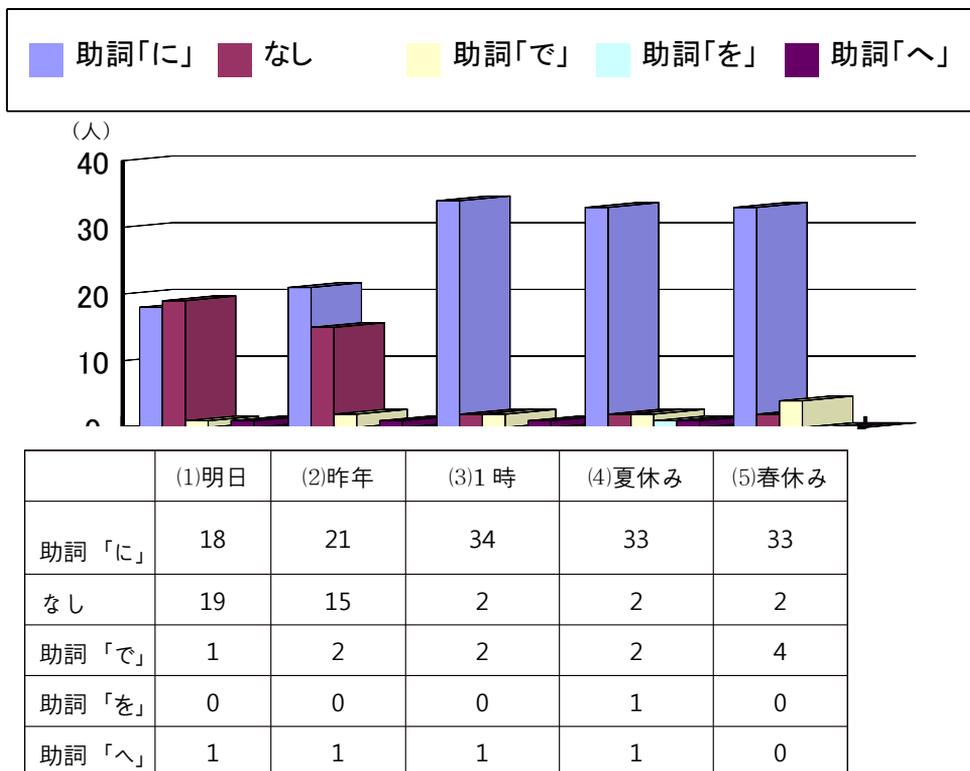
問題 3)、4)、5) は予想通り正答率の高い結果となった。また問題 2) に関しても同様に予想通り正答率が低かった。一方で、問題 1) に関しては正答率が高くなる予想とは異なり、正答率が低い結果となった。

自信度においては全ての問題で平均 3.5 以上あり、全体的に自信度がおおよそ高いことがわかる。つまり誤答の学習者もある程度の自信をもって回答をしていることがわかる。

さらに各問題で学習者の回答と自信に何らかの関係があるのかを確かめるため、正答率と自信度の相関関係を調べた。問題 3) のみ中程度の相関があり、5%水準で有意な相関だと考えられる結果になった(相関係数  $r=0.46$ ,  $p<0.05$ ,  $d.f.=39$ )。

以下に、多肢選択問題における助詞の出現回数を示す図を提示する。発話時を基準とする名詞が使用されている問題 1) と問題 2) は助詞を選択しない学習者も同様に見られることがわかる(図 1)。

図1 > 多肢選択問題における助詞の出現回数



また正答率の低かった問題1)と問題2)の自信度に関する表とグラフ(図2, 3)も提示する。図2, 3は助詞「に」を選択した学習者と、助詞なしを選択した学習者のみの回答をまとめたものである<sup>8)</sup>。この図から助詞「に」を選択した学習者も助詞なしを選択した学習者も自信がおおよそ高いことがわかる。

<sup>8)</sup> 問題2)では助詞「に」と助詞なしを選択した学習者は36名いるが、自信度の回答は1名未記入だったため、図3は35名分のデータで作成した。

〈図 2〉 問題 1 ) 「明日友達に会います °」の自信度

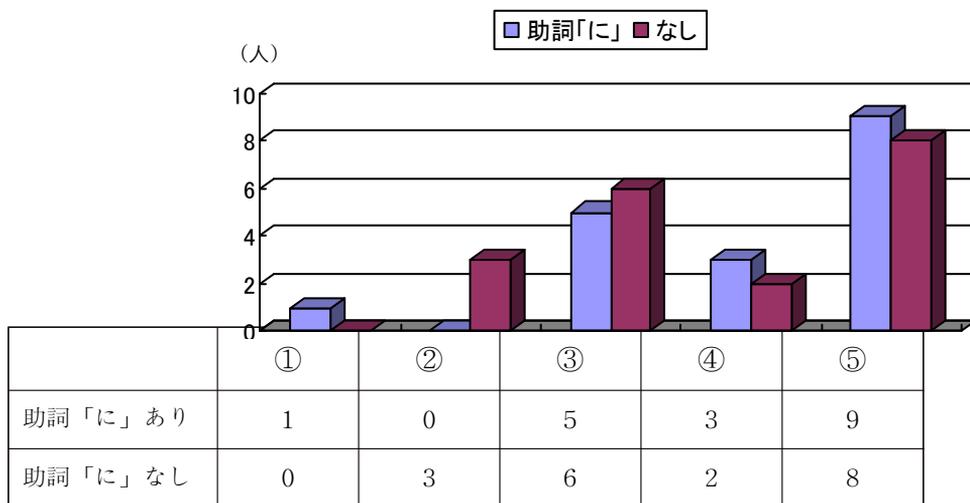
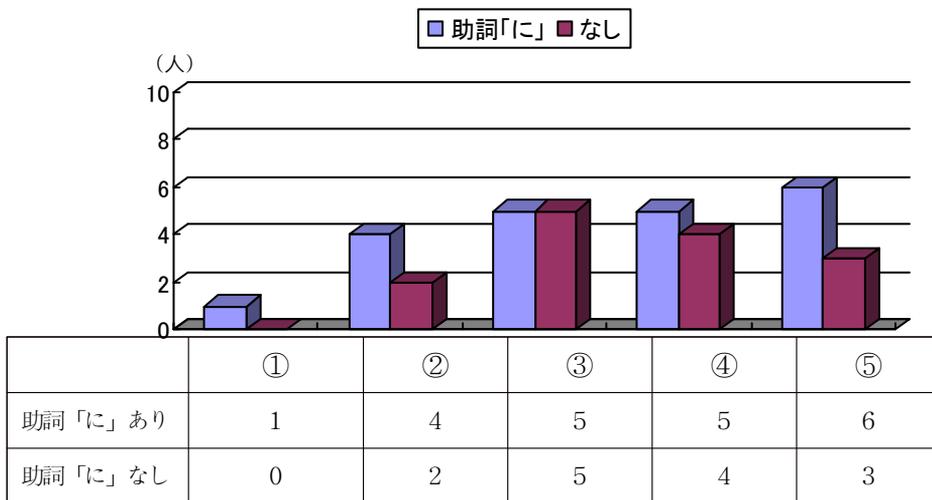


図 3〉 問題 2 ) 「私の弟は昨年高校を卒業しました °」の自信度

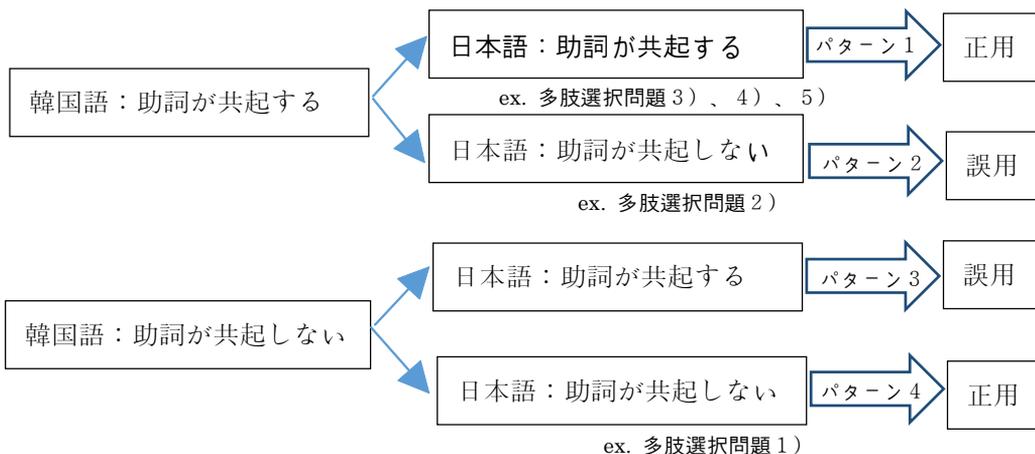


## 第 5 章 考察

これまでの調査結果から課題を踏まえて考察を行う。まず、学習者が母語の影響を受けることを前提に両言語とも意味が同じ名詞でそれぞれの名詞に対する助詞「に」「에」の

共起の組み合わせには以下のような4パターンが考えられ、それぞれの組み合わせから予想される正誤は以下の通りである<sup>9)</sup>。

〈図4〉韓国語と日本語の組み合わせによって予想される正誤



パターン1、4は韓国語と日本語で助詞の使い方が一致しているため、結果は正用になると考えられる。一方でパターン2、3は韓国語と日本語で助詞の共起関係が不一致であるため、パターン2では発話時に助詞「に」が共起し不自然になり、パターン3では発話時に助詞「に」が共起せず不自然になることが考えられる。

### 5.1 学習者の時を表す名詞と助詞「に」の共起関係の実態について

発話時を基準とする時を表す名詞に関して、特定項目誘出調査では「きのう、きょう、あさって、先々週、先週、今週、来週、再来週、先月、来月」が現れた。「きのう、きょう、あさって」は助詞「に」が共起することはほとんどなく、正しく使えていると考えられる。しかし、その他の発話時を基準とする時を表す名詞に関しては助詞「に」を共起させていた学習者もあり、日本語文法とは異なる結果が現れた。学習者の発話時を基準とする名詞と助詞「に」の共起関係は目標言語である日本語とは異なる可能性がある。

「週」で終わる名詞「先々週、先週、今週、来週、再来週」の結果をまとめると、助詞「に」が共起していることが多い(10/12回)。「週」という語は韓国語で「주」という語を用い、「지난주(先週)、이번주(今週)、다음주(来週)」のように使用される。

<sup>9)</sup> 本研究ではパターン3は結果的に現れなかった。

日本語に直訳した場合「過ぎた週、今回の週、次の週」のような修飾語になる。韓国語も日本語もこの場合は「週」、「주」そのものが発話時を基準とする名詞ではないため、助詞が共起すると考えられる。また益岡・田窪（1992）は「展示会は先週の土曜日に始まった。」のように発話時を基準とする名詞と絶対的に指し示す時点を表す名詞が接続する場合は、後続する名詞の種類によって助詞「に」の有無が決まるとしていることから、韓国語の「지난주(先週)、이번주(今週)、다음주(来週)」とはやや異なるが、表す意味よりも修飾されている名詞の種類によって助詞「에」の有無が決まると考えれば、発話時を基準として表す意味でも、この場合は助詞「에」が共起することが考えられる。そして学習者がこの影響を受けている場合、助詞「に」の共起は起こる可能性がある。

「月」で終わる「先月」「来月」は出現数が少なかった（2 / 3 回）が、この場合も「週」で終わる項目と同様に「月」は韓国語の固有語「달」が用いられるため、「지난 달、다음 달」のようになる。これらの名詞も日本語で直訳すると「過ぎた月、次の月」といった表現になる。この場合も両言語とも助詞が共起すると考えられ、韓国語は固有語でも修飾語の場合は固有語、漢字語の区別に関係なく助詞「에」が共起する可能性がある。このように韓国語の発話時を基準とする一部の名詞の表し方が日本語と異なったために助詞「に」を共起させたと考えられる。

多肢選択問題では、問題 1) と問題 2) が発話時を基準とする名詞を含む問題である。それぞれ助詞「に」が共起すると不自然であるため、助詞「に」を共起させなかった学習者もいる一方で、助詞「に」を選択した学習者が目立った。問題 1) は図 2 のパターン 4 に当たり、問題 2) はパターン 2 に当たる。問題 2) は誤用が予想される問題であり、誤用をした学習者が目立ったのも理解できる。一方で問題 1) は正用が予想される問題であるにも関わらず、助詞「に」を共起させる誤用が目立つ結果になった。

問題 2) の時を表す名詞「昨年」は韓国語では「작년」と表される。「작년」は助詞「에」が共起する。また学習者はフォローアップインタビューで「韓国語では『에』を使える。」「会話的には『에』があった方が理解できる。」という回答をし、助詞「에」の共起が可能であることが言え、その影響を受けたと考えられる。

「작년」と同様に「내년(来年)」も助詞「에」が共起できると考えられる。以下の発話時を基準とする名詞「来年」を含む例文から、言語間で助詞の共起に違いがあることがわかる。「今週」、「来週」とは異なり、「작년」、「내년」は元々、助詞「에」が共起する発話時を基準とする名詞であることが考えられる。

2a 来年結婚するつもりです。

내년에 결혼할 생각입니다.

박·나고 (2001 : 60)

2b 金珍宇さんは来年国へ帰るようです。

김진우씨는 내년에 고국으로 돌아갈 것 같습니다.

박·나고 (2001 : 130)

このように学習者の発話時を基準とする名詞の実態には不自然な形がみられ、韓国語の時を表す名詞と助詞の共起実態が影響し、学習者の発話時を基準とする名詞と助詞「に」の共起実態に結びついていると考えられる。発話時を基準とする名詞は両言語を比較した場合、以下のように分類され、相違点があり、その相違がそのまま影響する場合 2 と 3 は学習者が助詞「に」を共起させてしまうことが考えられる。

1. 日本語も韓国語も助詞が共起しない名詞 (きのう、きょう、あした)
2. 日本語と韓国語で助詞の共起が異なる名詞 (昨年、来年)
3. 日本語と韓国語で表し方が異なる名詞 (先週、今週、来週)

## 5.2 学習者の時を表す名詞と助詞「に」の選択は何が影響しているか

蓮池 (2007) が韓国語には、日本語の助詞に類似した機能をもつ助詞が数多く存在すると述べているように、日本語と韓国語で類似した機能を持つ助詞が存在する。そのため助詞「に」の自然な選択も不自然な選択も母語の影響を受けていることがまず考えられる。

しかし、本調査で使用した時を表す名詞や調査で得られた時を表す名詞は韓国語を日本語に置き換えれば自然な表現になるというものがすべてではなかった。そして学習者の誤用原因が言語間の文法的な差異だけにあるわけではないと考えられるため、学習者の時を表す名詞に対する助詞「に」の選択には母語の影響とは別の影響も考えなければならない。

### 5.2.1 母語の影響

まず、母語の影響を考える。発話時を基準とする名詞以外の名詞は、多肢選択問題の結果をみても助詞「に」を共起させている回答が多かった。回答に出現した名詞は韓国語でも助詞「에」が共起すると考えられ、フォローアップインタビューで韓国語の助詞「에」と助詞「に」を置き換えているような意見もあり、正用には母語の影響が伺える。

また正用だけではなく、誤用においても母語の影響が見られる。多肢選択問題の問題 2) や不自然な使用をした学習者の「韓国語でも『에』が付くから、頭で変換して『に』を入れた。」、「韓国語のように日本語を使ったから」というフォローアップインタビューで得られたコメントから、母語である韓国語の影響を受けて助詞「に」の選択をし、結果的に不自然な文になっていることが考えられた。このことから母語の影響が助詞「に」の選択の一要因であることが考えられる。

### 5.2.2 訓練上の影響

教室での練習などの訓練上の影響も要因として考えられる。本研究のきっかけにもなった「明日に会いましょう」に関して、学習者は、「『に会う』と勉強しているから」など、「に会う」という文型を理由に挙げ、時を表す名詞と助詞「に」との関係ではなく、「[人]に+会う」という形の副次的な影響により誤用に結びついたと考えられる。「[人]に会う」という項目は韓国語の言い方では「[사람]을 만나다. ([人]を会う)」という言い方であり、学習者が誤用しやすい項目である。そのため「に会う」という訓練上の影響により、助詞「に」を選択したことが考えられる。

また教科書も要因として考えられる。以下のデータは、筆者が韓国に滞在していた期間に使用した教科書から得たデータである。訓練上の影響には、教科書に記載してある時を表す名詞と助詞「に」の不自然な使用や、日本語の例文に対する韓国語訳の助詞の有無などの影響も大きいと考えられる。教科書に載っている発話時を基準とする名詞を抽出したところ以下のような結果になった。

表 7 教科書(박·나고 2001, 정 2013, 하·우노 2012)で使用されている時を表す名詞

名詞	助詞「に」なし	名詞	助詞「に」なし
あした	22	今年	1
きのう	21	来週	1
来年	3	先月	1
今晚	2	今月	1
昨夜	2	来月	1
今朝	2	今度	1
きょう	1	先日	1

表をみると、すべての名詞に助詞「に」が一切共起していないことがわかる。つまり教科書に現れる発話時を基準とする時を表す名詞を見る限り、学習者の発話時を基準とする名詞に対し助詞「に」が共起する誤用の原因に教科書の影響があるとは考えにくい。つまり、学習者の誤用には教科書の影響よりも強い影響が要因としてある、あるいは学習者の中で助詞「に」を共起させる時とそうでない時があるため、時を表す名詞すべてに助詞「に」を共起させてしまうという要因が考えられる。

### 5.2.3 中間言語知識の表出

これまでの考察では、母語の影響、訓練上の影響などが見られたが、多肢選択問題の問題1)はそれらの影響だけでは説明ができない。そのような学習者の時を表す名詞と助詞「に」の選択に関する結果には中間言語<sup>10)</sup>を考える必要がある。本研究では直接的に母語や訓練上の影響が助詞「に」の選択を引き起こしていると考えられない場合、学習者の中間言語知識が表出した結果であるという解釈をする。

多肢選択問題で最も正答率が低かった問題1)の場合、学習者は助詞を共起させないと予想したが、実際の結果では助詞「に」を選択する学習者も目立った。この結果に関しては、学習者に再度フォローアップインタビューを行い、助詞「に」の選択理由、助詞なしの選択理由を尋ねた。その結果には母語の影響や、訓練上の影響が考えられるものがあったが、もっとも多かったものは学習者の中間言語知識が表出したものだと考えられる回答である。

学習者のコメントは表6, 7の通りである。中間言語知識が表出したものが調査結果となっていると考えられるが、表出したものの中でも助詞「に」を選択した学習者は文法性、特に助詞について言及し、学習者の中にこれまでに構築された文法性に関する言語知識を回答する際に用いていると考えられた(例:「に」の意味のためにそのようにしました)。一方で助詞なしを選択した学習者は、助詞の働きや意味を意識した言及がないことから、学習者自身の感覚で判断していると考えられる(例:ただ、付かないと思ったからです)。中間言語知識の表出といっても助詞「に」を選択した学習者と助詞なしを選択した学習者とで回答する際の判断材料として頼る言語知識項目が異なることが考えられた<sup>11)</sup>。

<sup>10)</sup> 小柳(2004)では母語でも目標言語でもない学習者が作り上げた独自の発達途上の言語体系のことだと述べられている。

<sup>11)</sup> ただし、学習者の中間言語知識は今後も徐々に変化する連続したものである。本調査では学習者の用いた知識項目が異なると考察したが、フォローアップインタビューをした時点

〈表 8〉助詞「に」を選択した学習者のコメント

学習者 08	『に』と『へ』は意味が『에』 『로』と同じですが『に』が慣れていて『へ』はなんか場所的にとても遠いところを表す感じだから『に』を使いました。°
学習者 16	「『に』の意味のためにそのようにしました。°韓国語ではだめですけど、日本語では付く場合もあるからそうしたと思います。°」
学習者 23	「その時は『に』を入れて『あしたには友達に会います』と解釈して入れたと思います。°」
学習者 27	「文法的に合っている表現だと思ったから」
学習者 30	「『明日になる』などの答えが密接な関係があるのではないかと思って『に』を選択しました。°」
学習者 31	「『に』が付いても『明日』と解釈しても大丈夫だと思ったからしました。°」

〈表 9〉助詞なしを選択した学習者のコメント

学習者 05	「点（読点）が入る場所だと思ったからです。°」
学習者 09	「たぶん今日、明日、来週などの大部分は付かなくてもいいと思って、『明日、友だちに会います。°』のような感じで『なし』を選んだと思います。°」
学習者 10	「ただ、付かないと思ったからです。°」
学習者 26	「自然だから」
学習者 28	「その時は話すとき使ってないからそう思った。°」
学習者 32	「他の選択肢はおかしいと思ってない方がふさわしいです。°」
学習者 34	「明日、友だちに会います。°と考えて「なし」としたと思います。°」
学習者 35	「たぶん、『明日、友だちに会います』の方がもっと言いやすいし、耳になれている感じだからです。°」

での結果である。必ずしも助詞「に」を選択した学習者と助詞なしを選択した学習者が頼る知識項目が異なるとは限らない。これは本調査の結果を否定するものではなく、中間言語知識が常に発達途上の段階にあることを示すものである。

## 第6章 おわりに

本稿では研究課題2点を明らかにすることに取り組んだ。研究課題の1つである発話時を基準とする名詞と助詞「に」の共起実態を明らかにする課題に関しては、特定項目誘出調査において個々の項目ではまとまった回答は得られなかったものの、その共起実態から「週」、「月」の付く発話時を基準とする名詞(例:来週、来月)は、助詞「に」を共起させる傾向にあることがわかった。これは日本語と韓国語で表し方が異なるため、助詞「に」が共起したことが考えられた。

また発話時を基準とする名詞に対する助詞「に」の選択原因を明らかにする課題では、フォローアップインタビューや教科書の時を表す名詞の抽出結果から母語に加え、訓練上の影響や中間言語知識の表出が選択の要因として考えられた。

本研究では学習者が頻繁に用いるであろう時を表す名詞においても、助詞「に」との共起関係で習得困難であると考えられる項目があった。また「先生、明日に会いましょう」のように対照研究の立場からは考えられない項目が明らかになった。今後は「あした」のように習得困難な項目がないか調査していくと同時に、その誤用原因についても調査していく必要がある。

さらに、本研究では調査時間の関係上、特定項目誘出調査の質問項目数や多肢選択問題の問題数は限られた数しか行えなかった。また、「に会う」という形で学習し、その副的な影響で「明日に会いましょう」という形で誤用が表れることがわかったため、今後は述語との関係もみていく必要がある。また学習期間の比較を踏まえた考察が必要だと考えられ、学習期間によって結果がどのように異なり、どのような傾向にあるのかについても今後言及する必要がある。

### 【参考文献】

국립국어원 (2005) 『한국어 교육 총서 1 외국인을 위한 한국어 문법 1 체계편』 커뮤니케이션북스

- 박순애, 나고마리(2001) 『커뮤니케이션 일본어 2』 사람 in 커뮤니케이션
- 정의상 (2013) 『New 스타일 일본어 문법』 동양북스
- 하영애, 우노히토미 (2012) 『NEW すくすく日本語』 4 파고다북스
- 홍순성 (2003) 「시간부사와격조사‘~에’의공기(共起)관계」 『한민족어문학』  
제 42 집 한민족어문학회 pp.197-214
- 荻宿紀子 (2010) 「談話におけるニ格助詞の非出現条件について」 『早稲田大学大学院教育学研究  
科紀要』 別冊 17 号 2 早稲田大学大学院教育学研究科 pp.323-335
- 小柳かおる(2004) 『日本語教師のための新しい言語習得概論』 スリーエーネットワーク
- 丹保健一 (2010) 「時間名詞の特性に関する一考察：格助詞「に」との共起に注目して」 『三重大  
学教育学部研究紀要』 三重大学教育学部 第 61 卷 pp.39-47
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味』 第Ⅱ卷 くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法 2』 くろしお出版
- 蓮池いずみ (2007) 「韓国語母語話者の格助詞使用に見られる負の転移-絵の描写タスクにおける  
「に」の多用を中心に-」 『일본어교육연구』 12 권 한국일어교육학회 pp.65-79
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法・改訂版』 くろしお出版

논문 투고 일자 : 2015. 11. 30
논문 심사 일자 : 2016. 1. 31
게재 확정 일자 : 2016. 2. 4

時を表す名詞と助詞「に」の共起関係  
韓国人日本語学習者の発話時を基準とする名詞を中心に

安田寛二

本研究は韓国人日本語学習者を対象に時を表す名詞、特に発話時を基準とする名詞と助詞「に」の共起関係に関するものである。本研究は対照研究的な観点から日本語と韓国語を比較し、それを基に調査を行い学習者の時を表す名詞と助詞「に」の共起実態、習得状況を明らかにする習得研究である。発話時を基準とする名詞と助詞「に」の共起実態、助詞「に」の選択の要因として母語の影響、訓練上の影響、中間言語知識の表出が考えられる。

Co-occurrence of Time Nouns and Particle “ni”  
Focusing on Time Nouns Based in the Present in Korean JSL learners.

Kanji Yasuda

The present research is about the co-occurrence of time nouns and the particle *ni* in the Japanese output of Korean JSL learners. The paper focuses on time nouns based in the present. This research on the study of second language acquisition investigates the co-occurrence of time nouns and the particle *ni* in Korean JSL learners based on comparing Japanese and Korean by contrastive study. Reasons behind the learners' output are considered. It is speculated that differences in the usage of time nouns in Korean and Japanese influence the choices of the learners. Influence from practice and interlanguage are suggested as additional factors.